

土木学会四国支部「土木紀行」No.46(愛媛県)

～別子銅山(べっしどうざん)～

別子銅山は、足尾銅山（栃木県）・日立銅山（茨城県）と並んで、日本三大銅山の一つに数えられ愛媛県新居浜市にある。別子銅山の歴史は長く、1691年(江戸時代後期)から1973年(昭和48年)まで283年にわたり採鉱された。かの有名な住友グループの発展の主要産業であり、住友は開坑から閉坑まで永きにわたって鉱山を経営した。このような一企業で300年近く採鉱を続けられた鉱山は世界的に見ても例がない。最盛期には別子銅山には12000人もの人が居住していた。しかし、資源の枯渇、海面下1000m以上に及んだ坑道の危険性の増加、銅の価格下落などの影響を受け、昭和48年に閉山となった。現在は別子銅山のために切り開かれた山の中には人は住んでいない。銅山開発のため、この山域の木々は斬られ、荒涼していた。そのため、別子銅山2代目支配人伊庭貞剛氏が植林活動を開始し、それはその後も受け継がれ、人が撤退した町は自然に還っていった。

その始まりは、一説によると、元禄3年(1690)阿波生まれの渡り坑夫・切り上がり長兵衛が天領であった別子山村で有望な“やけ”(銅鉱床の露頭)を発見し、備中吉岡銅山の住友家支配人・田向重右衛門に通報したといわれている。田向重右衛門は、幕府の代官所で入山許可を得た後、苦労の末、露頭を見つけた。その鉱脈は、長さ東西1,500m、深さ海拔1,300mから海面下1,000mにも及ぶ世界でもトップクラスの大鉱脈の先端であった。

住友家第四代友芳が稼行請負願を出し、幕府から許可されると、翌年の元禄4年(1691)に別子銅山は開坑され、最初の坑口を「歓喜坑」(写真1)と名付け、住友挙げての大事業が開始されました。天満から別子銅山までの山道の整備から開始され、採鉱初年の産銅量は、約19tといわれている。

幕府の長崎貿易の代金支払いが銀から銅に代わり、銅が最大の輸出品になると、幕府は銅山開発に力を注ぎ、元禄時代には、日本の産銅量は約6,000tに達し、世界最高だったといわれ、別子銅山も開坑からわずか8年の元禄11年(1698)に年間産銅量約1,500t以上を記録するなど、当時の世界最高の産銅量を誇る銅山でした。

その後、元禄7年(1694)の別子銅山の焼き窯



写真1 歓喜坑



写真2 第一通洞

からの出火・明治 32 年（1899）の台風による集中豪雨からの山津波などの被害や、それに伴う施設の移転、産銅量の低下、また、幕府の御用銅の買上げ制度の廃止などにより、経営が危機に陥るなど様々な苦難がありました。最後は市況低迷による業績悪化などから、別子銅山は昭和 48 年（1973）、283 年の歴史に幕を閉じました。坑道の延長は約 700km、最下底坑道は海面下 1,020m に達した。なお、開坑以来の出鉱量は約 3,000 万 t、産銅量は約 65 万 t でした。

かつて銅山で働いていた従業員のための社宅や厚生施設などが集積した地に現在、別子銅山記念館という建物がある。新居浜市発展の礎となり、日本経済発展に貢献した別子銅山の意義を永く後世に伝えるため、住友グループの協力によって昭和 50 年（1975）に建設された。

建物は、鉱山坑内を彷彿させる独得の半地下構造になっており、泉屋、歴史、地質鉱床、生活風俗、技術の各コーナーを設置して、貴重な資料を展示しているほか、この記念館の前には、ドイツのクラウス社から購入し、日本最初の山岳鉱山専用鉄道である「別子 1 号」の蒸気機関車が保存展示されている。

また、記念の屋根には、別子銅山が開坑された五月にちなみサツキが 10,000 本周囲には 3,000 本植えられ、市内随一のサツキの名所として市民や観光客に親しまれている。別子銅山の観光とともに一度訪れてみてはどうでしょう。



写真 3 別子 1 号



写真 4 別子銅山記念館

参考文献：新居浜物語(新居浜市公式ホームページ)

<http://www.city.niihama.lg.jp/>

週末の旅人

<http://www.geocities.jp/syumatsunotabibito/index.htm>

(愛媛大学工学部 環境建設工学科 4 年 森川貴章)